

例会 作品 帳

◎平成二十五年十一月十六日(第十八回)

(佐藤 亮照)

同じ歳友を送りしその時に俺は別よと思う愚かさ

もみじ茶会疲れ果てての反省会来たりし客の笑顔が浮かぶ

もみじ茶よもみじもみじと言うけれど歳降る幹に繁るもみじ茶

もみじ茶を愛てる多くの人たちよ春夏冬の趣知るらん

(黒沼 貞志)

窓の外流るる新緑きらめいて列車の旅に期待膨らむ

年かさね連立つ旅の賑わいの交わす会話に訛り溢れて

二年過ぎいゝ何処やら車窓の向こうは春光るフクシマ

西陽射す棚田一面水かがみ早苗に重ねて稲穂を想わん

歳かさね暑さ身に沁む梅雨盛り髪すく妻にカット勧めん

昼下がりに会合終えし軒先は燕を話題に再び賑わう

頂で龍山蔵王仰ぎ見て語らう会話に疲れは何処

春寒や蝶も暫しの羽根休め山の小径は陽だまりの中

買物によそ行き姿で連立ちて気付いてみれば主脇役

母娘孫期待をこめて「つばさ」待つ桜脇役シャッターチャンス

競うよにさくらと山茶葵咲き満ちて見上げし先に雪国の春

大会の主の成果じつと待つ揃う道具は無言の語り部

腰を据え一片一房一枝とさくら描かん一人の世界

腰を折り足をも伸ばし一コマに想いを籠めて早春スケッチ

満開の桜花の下で語り合ふ父子のそばにスマホの母居り

路の蓋桜がくしの翌朝に再びまみゆ山里の春

里山に仲間連立ち春探し桜を前にカメラの放映

鳴り渡る太鼓の音に集い寄り共に拓かん山里の春

歌に 触れる

遊 縁 の 衆 (人生を数倍楽む会)

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

ヤマブキの群れる斜面に声も無くひとときわ響くシッターの音
深緑と秘仏求めて人の数珠四時間待ちも苦にせぬご利益
著莪しやがの花木漏れ陽の中涼しげにさりげなく咲きひとを迎えん
新緑と重なる岩の奥の奥小さき仏に心洗わる

「雨音はシヨパンの調べ」想い出し写真組みつつユーミンはもる

フィットネス終えて浸かりし午後のスパひと雨あがりよしすが光る
主去る家の庭先草がくれ人の香りも露にまぶれて

フィットネス会話飛び交う社交場平日午後はたそがれの中
ゆく夏を惜しむが如き荒梅雨の去りし後にはゆきあいの空

荒梅雨の天元台は霧の中リフトが誘う二人の世界

ゲレンデを独り占めして駆け下る父子の一夏心に残らん

親子孫揃い楽しむ夏の高原鐘を響かせ祈るひと時

高原でハイカー迎える白き花岩場の陰で風に耐えつつ

涼もどめ山の帰りにいただきし初秋あきの気配で客もてなさん

高原の広場の隅に身を置いてひとりふけで耽る読書の時間

我が家にも花野を添えて秋かざりそつと脇役祭りの写真

(千葉 克明)

秋深し言えぬ間に来た冬將軍巻をおおう異常気象

秋野菜もろて両手使うも抜きがたく天の恵みと一人ほほえむ